

「あの子のうつつ」

林実歩

登場人物

高島 綾 (17) 会社員

松井桃子 (17) (25) 美月の同居人

三浦 純 (22) 美月の後輩

金沢亮平 (26) 桃子の婚約者

津島祥子 (50) 三浦の客

河村結衣 (24) 美月の後輩

田辺正雄 (50) 課長

女子生徒

司会

○ ≪回想≫ 高校・家庭科室（8年前）

調理実習。松井桃子（17）、真剣な顔で鍋にほうれん草を入れる。

高島綾（17）、向かいのテーブルから桃子を見ている。

逆さまのほうれん草がゆっくりと湯に浸かっている。

綾 M 「ほうれん草って、こんなに綺麗な色だっけ。って思った」

他の生徒達、一つの机に集まり、コンロでマッシュマロを炙る。

女子生徒「綾。マッシュマロ焼いていいってー」
綾「マジ？」

綾、桃子を気にしながら、他の生徒達の方に歩く。

○ 横断歩道（夜）

高島綾（25）、買い物の袋を持ち、赤信号の前で立ち止まる。
ふと向かいに誰かを見つける。

信号が青に変わる。駆け出す綾。

綾「桃子」

松井桃子（25）、綾に肩を叩かれ、

振り向く

桃子「わっ。綾。びっくりした」

綾と桃子、並んで歩き出す。

綾「ほうれん草買った」

桃子「ほんと好きだよね」

綾「あとシュークリームも」

桃子「え？家にあるよ？」

綾「嘘！そうだった」

桃子「…わざと？」

綾「違うよ」

タイトル『あの子のうつつ』

○マンション・中（夜）

机の上に白米、ほうれん草のおひたし
とシュークリーム。

綾「やっぱり桃子が作ると綺麗な緑色なんだ

よね」

桃子「何それ。誰が作っても一緒だよ」

綾「違うね。桃子のは特別」

綾、立ったままおひたしを一口食べる。

桃子「座って食べなさい」

綾「はい」

×

×

×

綾、皿を洗う。桃子、隣に立ち、洗っ

た皿を拭く。

綾「あ、ありがとう」

桃子「うん」

綾「あー幸せだなー」

桃子「（笑って）それはよかったですね」

綾「こんなに可愛いお嫁さんがいるんだもん」

桃子「私、綾のお嫁さんじゃないんですけど」

綾「おばあちゃんになったらさ、お互いに介
護しようね」

桃子「ヨボヨボ同士じゃ無理だよ」

綾「そうかあ。じゃあヨボヨボにならないように、ジョギングでもしよう」

桃子「はいはい」

○マンション・中（朝）

綾、メロンパンを食べながらぼーっとしている。

その目線の先、桃子、ドレッサーの前で化粧をする。

綾「可愛い」

桃子「時間大丈夫？」

綾「え？（時計を見て）やばっ」

綾、パンを口に詰め込み、慌ててジャケットを羽織る。

桃子「待って」

桃子、綾に口紅を塗る。

桃子「よし」

綾「ん。これ新しいやつ？」

桃子「そう。亮平くんがくれたの」

綾「出た。結婚詐欺師」

桃子「だから違うって。真面目で誠実な彼氏ですー」

○会社・中（朝）

小さなオフィス。10名ほどの社員がデスクで作業している。

綾、自分のデスクへ向かう。

田辺正雄（50）、おにぎりを食べている。

綾「おはようございまーす」

田辺「おはよう」

綾、観葉植物の周りを見る。

綾「あれ、ここ綺麗になってる。もしかして

三浦くんやってくれた？」

三浦純（22）、綾を無視して作業している。

河村結衣（24）、綾の隣の席から、

河村「私です」

綾「河村か。ありがとうね」

河村「（わざと大きな声で）あーあ。新人くんが入って雑用係は卒業できると思ったのになー」

三浦、河村を一瞥する。

綾「ちよっと」

田辺「こらこら。そういうのは年齢関係なく気づいた人がやるっていうルールでしょ？高島も気づいてたなら放置しないで」

綾「：すみません」

○同・中（夕）

綾、デスクで伸びをする。

綾「終わったー！」

河村、やって来て、

河村「高島さん。今日の飲み会の店予約しましたよ。いつもの所です」

綾「サンキューありがとう」

綾、荷物をまとめる三浦が目に入る。

綾「ちゃんと三浦くんも誘った？」

河村「誘ってないですよ。どうせ来ませんもん」

綾「それでも一応声掛けなきゃ。ねえ三浦くん！」

河村「ちよっと……」

三浦、振り向いて、

三浦「大丈夫です」

三浦、一礼してオフィスを出ていく。

あ然とする綾。

綾「大、丈、夫……」

○大衆居酒屋・中（夜）

河村、飲み干したジョッキを強く置く。

河村「一回ちゃんと怒った方がいいですって！」

綾、河村の正面で困った顔。

綾「まあまあ、飲み会苦手なんじゃない？」

河村「飲み会だけじゃないですよ。あの人、挨拶してもこっちは見ないし、いつもパソコ

ンいじりながら話聞いているし。ちゃんと聞いているのかも怪しいし」

綾「うーん。でもまだ入ったばかりだし…」

河村「そうやって甘やかすといつまでも成長
しませんよ」

綾、近くに座る田辺に助けを求める。

田辺、申し訳なさそうに目を逸らす。

河村「私達のこと嫌いなのは勝手にしたらいいですけど、仕事中くらい愛想良くできないもんですかね」

沈黙。綾、立ち上がる。

綾「はいはい！一発芸やりまーす」

河村「え？急に？」

周りにはきよとんとして綾を見ている。

綾「腹太鼓ダンス最新バージョンです」

綾、腹をポンポコ叩きながら踊る。

河村、田辺、笑う。

○マンション・中（夜）

綾、フラフラで帰宅する。

綾「ただいまー」

桃子、慌ててやって来て、綾を支える。

桃子「あーあー。ちよつと大丈夫？」

綾「ねむーい。桃子せんせー」

綾、チューの口で桃子に迫る。

桃子、綾の顔を抑える。

桃子「コラ！」

× × ×

綾、布団をかけられ、眠っている。

その隣で洗濯物を畳む桃子、綾を見つめる。

○会社・中（朝）

綾、入ってくる。

三浦、オフィスに1人で作業している。

綾「三浦くんおはよう」

三浦「おはようございます」

綾「早いね。どうしたの？」

三浦「別に」

綾「私はね、今日なんとなく早起きできちゃ
って」

三浦「はい」

綾「…朝ごはん食べた？」

三浦「いえ」

綾「食べてないの？何かコンビニで買ってこ
うか？」

三浦「大丈夫です」

綾「あ、朝は食べないタイプ？私の友達にも
いるよーそういう人」

三浦、無視して作業している。

綾「でもさ、朝ごはんは食べた方がいいと思
うんだよね。小学校で習ったじゃん？朝ご
はん食べないと授業中眠くなっちゃうよー
って」

三浦、少し語気を強めて、

三浦「僕は眠くならないので。大丈夫です」

綾「…大丈夫かあ」

綾、きまり悪そうに席につく。

○マンション・中（夜）

綾と桃子、オムライスを食べる。

綾「どう？」

桃子「美味しい」

綾「でしょ。今日のはふわふわにできた自信
あるもん」

桃子「うん」

桃子、上の空。綾、不思議そうに、

綾「…聞ってる？」

桃子、笑顔を作る。

桃子「え？ああ、聞ってるよ」

綾「嘘じゃん。嘘の時の顔」

桃子、綾を見つめる。

桃子「…：ごめん」

桃子、スプーンを置く。

桃子「私、結婚する」

綾「…は？」

桃子「結婚するね」

綾「ケッコン？」

綾、音を立てて立ち上がる。

綾「え、結婚？結婚詐欺師の彼氏と？」

桃子「詐欺じゃなくて本当に結婚するの」

綾「そんな急すぎるよ」

桃子「ごめん。ちゃんと色々決まってるから報告したくて」

綾「色々って…」

桃子「結婚式を、2ヶ月後にやることになったから」

綾、水を飲み、胸を叩く。桃子、心配そうに見ている。

桃子「それでね、亮平くんが綾に挨拶したいって」

綾「ええ？いいよそんなの」

桃子「亮平くんのこと結婚詐欺師って呼んでるって話したら、面白い子だね、会いたいですって言ってたよ」

綾「なおさら会いたくないよ！ていうか本人に言わないでよ！」

笑う桃子。綾、自分を落ち着かせるように一点を見つめる。

○中華料理屋・中（日替わり・夜）

桃子と金沢亮平（26）、綾の正面に座る。机の上には料理が並ぶ。

亮平「会いたかったよ綾ちゃん。よく桃子から聞いてたからさ」

綾「あはは。私も会いたかったです」

亮平「んじゃ、改めて：この度は大切なお友達を頂くことになってどうもすいません」

亮平、ちゃらけて両手を合わせる。

亮平「でも心配しないで。絶対幸せにするんで」

桃子「何それ」

桃子、嬉しそうに笑う。

綾「それなら安心だなあ」

綾、笑顔を作る。口角が震えている。

綾「小学校の、先生なんですよね？」

亮平「そうそう。去年まで桃子と同じ学校で、今年異動になったの。じゃあちようどいいし結婚しちゃうか！みたいな」

綾「…なるほど」

亮平「ほら、同じ学校にいと結婚できないじゃん」

綾「ですね」

料理を食べる3人。

奥の席に若い男女がやって来る。男性は三浦である。綾、驚いて凝視する。

三浦と女性は親しげに話し、食事をしている。優しく笑う三浦。

亮平「2人はさ、なんで一緒に住むことにしたの？」

桃子「…大学入る時、一緒に住もうって綾が言ってくれたんだよね」

綾「うん」

綾、三浦が気になって空返事である。

亮平「へー。なんかプロポーズみたい」

三浦、女性から封筒を受け取る。中からお札を取り出し、枚数を数える三浦。

綾「え？」

桃子「綾？どうしたの？」

桃子、不思議そうな顔。

綾「いや、なんでもない…」

亮平「ねえ餃子おかわりしていい？食べる？

あれば食べるっしょ？」

店員を呼ぶ亮平。綾、呆然とした様子で三浦から目が離せなくなっている。

○会社・中

PCで作業する綾、チラチラと三浦を見る。思い立ったように資料を持って

三浦に近づく。

綾「三浦くん」

三浦、顔を上げる。

綾「これ、確認したよ。完璧」

三浦「ありがとうございます」

三浦、資料を受け取り、すぐ作業に戻る。

綾「…あのさ、三浦くんって」

三浦、手を止める。

綾、逡巡する。

綾「三浦くんって、お休みの日は何してるの？」

三浦「はい？」

周りの社員、驚いて綾を見る。

綾「ごめん。ただ気になっただけで。言いたくなかったらいいんだ」

綾、自分の席に戻る。三浦、ほっとしたような表情。

○小学校・校庭

児童達、グループになり植物の観察をしている。

桃子、花壇の前に1人でしゃがんでいる児童に歩み寄る。

桃子「何か見つけた？」

児童、振り向く。花壇に萎れた花が咲いている。

桃子「あ。そのお花、お水あげようか」

桃子、微笑む。満足げに笑う児童。

○チャペル・ロビー（夜）

桃子と亮平、並んで座り、スタッフと話している。
机には結婚式の食事や衣装の資料が置かれている。

○駅前

綾と三浦、並んで歩く。

綾「打ち合わせ結構早く終わったね」

綾、定食屋を指差す。

綾「お昼食べよっか」

三浦「いえ、大丈夫です」

綾「もしかして用意して来ちゃった？」

三浦「いや…」

綾「じゃあいいじゃん。奢るからさ」

三浦「そういう問題じゃなくて：」

綾「お腹空いたから付き合って」

綾、三浦を定食屋に押し込む。

○定食屋・中

綾と三浦、向かい合って座る。綾、メニューを見ている。

三浦「気まずいですね」

綾「そんなこと言わないでよ」

綾、わざとらしい咳払い。

綾「私、三浦さんと仲良くなりたいたいんだよね」

三浦「：なんで僕と？」

綾「せっかく同じ会社に入った仲間じゃん」

三浦「しょうもない」

綾「え？」

三浦「どうせ人手不足で辞められたら困るか

らって課長にでも頼まれてるんですよね？」

綾「違うよ。本当に仲良くなりたくて：」

三浦「僕と仲良くなるメリットが無いでしょ」

綾「メリット？仲良い方が、毎日仕事してて
楽しいじゃんって、それだけなんだけど…」

三浦、水を飲む。

綾「(店員に)すみませーん」

店員の津島祥子(50)、やって来る。

注文する綾。

祥子、三浦を見て驚いた顔。

祥子「純くん？」

三浦、振り向く。

祥子「なんでここにいるの？今日仕事だから
会えないって言ってたよね？だから私、今
日シフト入れて、次のデートのために頑張
ってて…」

困惑する綾。

祥子「この人誰？」

綾、祥子と目が合う。

綾「え？あ、私は…」

祥子「まさか…」

三浦、立ち上がり、祥子を抱きしめる。

三浦「不安にさせてごめんね」

驚く綾。

三浦「取引先からの帰りで、この人は上司だよ」

祥子「…そうなの？」

綾、何度も頷く。

三浦「俺のこと信じてくれるでしょ？」

祥子「…うん。ごめんね。だってびっくりしたから」

三浦、微笑み、祥子の頭を撫でる。

三浦「いい子だね。また電話して。お仕事頑張ってね」

三浦、綾を見る。

三浦「行きましよう」

綾「え？でもまだ食べてないよ」

三浦、足速に店を出る。綾、困惑しながら三浦を追いかける。

○道

三浦を追いかける綾。

綾「ねえ、ちよつと」

三浦、早足で歩いている。

綾「三浦くん！」

綾、三浦の腕を掴む。

三浦、不安そうな顔で振り向く。綾、

少し驚いて、

綾「さっきの人、誰？」

三浦「知り合いです」

三浦、腕を解こうとする。強く掴んで

離さない綾。

綾「ああいうの、良くないよ」

三浦「何がですか」

綾「ママ活って言うんでしょ？」

三浦「…違いますけど」

綾「だって、この間も中華料理屋さんで、女

の人からお金貰ってたじゃん」

三浦、なぜ知ってるのかと驚いた顔。

綾「そういうのっていつか恨まれたりして、

三浦くんが危なくなるんだよ」

三浦、ため息をつく。

綾「ニュースで見たことあるもん。トラブル
になって刺されたとか？」

三浦「レンタル彼氏です」

綾「え？」

三浦「副業で、レンタル彼氏やってて」

綾「レンタル彼氏？三浦くんが？」

三浦「高島さんに説教されなくても、危険な
ことぐらい分かっています」

綾「説教って」

三浦「それに、困ったら会社が守ってくれる
ので心配しないでください」

三浦、綾の腕を振りほどき、財布を出
す。綾、怪訝そうな顔。

三浦「いくらで黙っててくれますか？」

綾、慌てて、

綾「いいよそんなの。誰にも言わないから」

三浦「信用できません」

綾「じゃあ、代わりに今度またご飯行こう。

それでいいよ」

三浦「それって高島さんにメリットありますか？」

綾「言ったじゃない。私、三浦さんと仲良くないりたいの」

三浦、ため息をつく。

三浦「…それでいいなら」

綾「やったー。ちょうど最近失恋して寂しかったんだよね」

三浦、眉をひそめる。

○ ≪回想≫ 高校・家庭科室（8年前）

桃子、鍋の中のほうれん草を菜箸で動かす。

と、目の前に串に刺さったマッシュマロが差し出される。

桃子、視線を上げる。

綾、マッシュマロを持っている。

綾「放つといていいんじゃない？」

桃子「でも、途中でひっくり返すって先生が」
綾、桃子の口にマッシュマロを押し込む。

桃子「え？ええ？」

桃子、戸惑いながら、マシユマロを食べる。

綾「美味しい？」

桃子「うん。：ありがとう。高島さん」

綾「ありがとうって。無理やり食べさせたのに」

桃子M「マシユマロってこんなに甘かったっけ。って考えてるうちに、溶けて無くなった」

○ ≪回想≫ 同・教室（8年前）

綾、桃子の机の前に座る。桃子、驚いた顔。

桃子「ええ？カラオケ？」

綾「文化祭の打ち上げ来てなかったでしょ。」

大人数が苦手なんだと思ったんだけど、違う？」

桃子「違くはないけど：」

綾「大丈夫。私、どんなに音痴でも笑わないから」

桃子「音痴じゃないよ！」

○《回想》カラオケ・個室（8年前）

桃子、緊張した様子で歌っている。綾、目を輝かせて見ている。

×

綾、桃子と肩を組んで楽しそうに歌う。

戸惑いながらも笑う桃子。

×

綾と桃子、並んで座っている。

桃子「あのさ、綾ちゃんは、なんで私と話してくれるの？」

綾「え？」

桃子、眉を下げて、綾を見つめる。

綾「別に、理由なんてないけど…」

桃子「いつも1人で可哀想って思ってるなら、無理に仲良くしなくていいよ」

綾、少し驚いた後、微笑む。

綾「私が一緒にいたいだけだよ」

桃子、綾を見つめる。瞳が揺れる。

○小学校・職員室（夜）

桃子、テストの丸付けをしている。他の教員は帰宅しており、ペンの音だけが響く。

桃子「はあ…」

スマホに綾から「まだ学校？シュークリーム買って来たから頑張れ！」というメッセージ。

桃子、クスツと笑う。

○マンション・中（夜）

シュークリームを食べる綾と亮平。桃子、嬉しそうに2人を見ている。

亮平「うま！これ良いとこのやつ？」

綾、戸惑う。

綾「いや、スーパーの安いやつですよ」

綾、小声で桃子に、

綾「来るって聞いてないんだけど」

桃子「ごめん。たまたま仕事終わる時間が同じだったから。これも見せたかったし」

桃子、桃子と亮平の似顔絵が描かれたウェルカムボードを持ってくる。

綾「結婚式の入り口に置くやつ？」

桃子「そう。大学の友達に頼んでたの」

亮平「めっちゃ似てるじゃん。あーなんか、本当に結婚するんだね。俺ら」

桃子「そうだよ」

桃子、嬉しそうに笑う。綾、少し俯く。

綾「楽しそうだね」

桃子「え？」

綾、笑顔を作る。

綾「ごめん。私、酔っ払ってるかも。もう寝るね。おやすみー」

綾、逃げるように寝室へ。それを心配
そうに見る桃子。

亮平、シュークリームを見る。

亮平「これお酒入ってるの？」

桃子「バカ」

○同・寝室（夜）

綾、布団を被る。

ぼーっとスマホを眺め、三浦の連絡先
を見て手を止める。

○公園・中

三浦、入口でキョロキョロと中を見回
す。

綾「あ、三浦くん！」

綾、ベンチに座り、手を振っている。

三浦、綾の元へ歩く。

綾「ありがとね。急だったのに」

三浦「…元気そうじゃないですか」

綾「あれ、心配してくれたの？」

三浦「騙されました。というか、なんで公園
なんですか？」

綾「だってカラオケはダメって言うから」

三浦「密室はダメっていう決まりなんです」

綾「それはレンタル彼氏の場合でしょ」

三浦「密室がダメでも他にカフェとか色々あ
ったでしょう」

綾「だってまた三浦くんのお客さんと会っち
やったら困るでしょ？」

三浦「え、それで公園に？」

三浦、驚いて綾を見つめる。

綾「ほら、ピクニックしよう。パン買って来
たから」

綾、パンが大量に入った袋を見せる。

三浦「何時間やるつもりですか？」

綾「私メロンパン大好きなんだよね。ほら座
って座って」

三浦、綾の隣に座る。

三浦「高島さんって、本当に誘う人ですよね」
綾「何が？」

三浦「ご飯行きましようとかって大体社交辞令じゃないですか。どうせ誘われないと思っ
てました」

綾「あー。そういう建前とか、寂しいから嫌いなんだ」

三浦「なんとなくわかります」

綾、三浦を見つめる。

綾「三浦くんは、なんでレンタル彼氏してるの？お金足りない？」

三浦「ストレス発散です」

綾「どういうこと？」

三浦「あの仕事してる時は、別の人間なんですよ」

綾「ごめん、あんまり意味が…」

三浦「あとは、早期退職したいからです」

綾「あー、三浦くんらしいね」

綾、姿勢を正す。

綾「じゃあ、次は私に質問していいよ」

三浦「いや、していいよと言われても。何も無いです」

綾「えー、何かあるでしょ。何でもいいんだよ」

三浦、綾を一瞥する。

三浦「失恋したって、誰にですか？」

綾「え」

綾、狼狽える。

綾「他には質問ない？」

三浦「ほら、答えたくないでしょ」

綾、俯く。

綾「…友達。っていうか、何というか」

綾、三浦の様子を伺いながら、

綾「その人、女の子なんだ」

三浦、少し驚いて綾を見る。すぐ前を
向き直す。

三浦「そうですか」

綾「あれ、びっくりしない？」

三浦「はい。安心しました。僕のこと好きになられたら困るので」

綾「ひどいなあ」

綾、安心したように笑う。

綾「でも、自分でもよく分からないんだ」

三浦「え？」

綾「ドキドキするような恋じゃないけど、一緒にいると幸せだなーって。でも、ただの友達じゃない。一生一緒にいたいし、誰にも取られたくなくて……」

三浦、パンを食べている。

気まずい空気。綾、思い立ったように立ち上がり、走り出す。

三浦「え？」

綾、鉄棒で逆上がりをしようとするが、できない。

三浦「……何してるんですか？」

綾「なんか、今ならできる気がしたんだけど」

綾、逆上がりをしようと頑張る。三浦、綾を見つめる。

○ ≪回想≫ 高校・教室（夕）

綾と桃子、教室に2人きり。ノートに落書きしている。

綾「なんで断っちゃったの。サッカー部のイ
ケメンから告られるなんてそうそうない
よ？」

桃子「だって、あんまり知らない人だったか
ら怖くて…」

綾「へー。もったいない」

桃子「私は、綾ちゃんがいたらそれだけで楽
しいから」

綾、落書きしながら、

綾「まあね」

桃子、目を伏せる。

桃子「…綾ちゃんが男の子ならよかったのに」

綾、顔を上げる。

綾「え？」

桃子、微笑む。

○マンション・中（夜）

綾、虚ろな表情。

綾「…男の子じゃなくてもいいじゃん」

綾、カップ麺の汁を飲み干す。

綾「はあ」

○道（夜）

綾、空を見上げながら歩く。

○公園・中（夜）

綾、ブランコに座っている。

祥子の声「ちよっと」

綾、振り向く。祥子、驚いた顔で近づいて来る。

祥子「やっぱりそうだ。この間の」

綾、目を丸くする。

綾「え？あ、定食屋の…」

祥子「すごい偶然。話したいと思ってたのよ」

祥子、綾をじっと見つめる。綾、不安な表情。

祥子「あなた、純くんの彼女なんですよ？」

綾「違います。本当にただの上司で…」

祥子、微笑む。

祥子「いいの」

綾「え？」

祥子「純くんのこと支えてくれる人がいるなら、私も安心だから。あの時は冷静じゃなかった」

祥子、綾の隣に座る。

祥子「それにしても、こんな夜遅くに何してるの？」

綾「ちよっと、眠れなくて。……お散歩ですか？」

祥子「毎晩ウォーキングしてるのよ。昔は息子と一緒に歩いてたんだけど」

綾「息子さんいるんですね」

祥子「ええ。でも、もう何年も会ってないの」
綾「そうなんですか」

祥子「息子が結婚した時、なんだか寂しくてお嫁さんに優しくしてあげられなかった。

そしたらもう縁を切るって言われちゃって」
祥子、軽くブランコを漕ぐ。

祥子「それから息子と同年くらいの子に会いたくなって、レンタル彼氏のサイトを見

てたら、純くんに出会ってね。息子とは顔も性格も違うけど、なんか放っておけなくて」

綾、祥子の横顔を見る。

祥子「純くんを、本当の息子だって思えたら、幸せかなあって思っちゃったの。馬鹿でしょ」

祥子、自嘲するように笑う。綾、狼狽える。

綾「えつと…」

祥子、綾を見て、微笑む。

祥子「気遣わなくていいのよ」

綾「違うんです。私も、同じだったかもしれないなくて」

祥子「え？」

綾「向こうにとってはただの友達でも、ずっと隣にいられるなら、なんでもいいやって思っていました」

祥子、綾を見つめ、俯く。

祥子「そう。自分を騙すのって難しいものよ
ね。幸せって、自分次第なはずなんだけど
ね」

○会社・中

綾、デスクに座り遠い目をしている。

河村「高島さん」

綾「え？あ、どうした？」

河村、隣のデスクから綾を見ている。

河村「だから、今夜ご飯どうですかっ」

綾「ああ。ごめん。今日はやめとこうかな」

河村「はい。：最近忙しいんですか？」

綾、資料の束を取ろうとする。

綾「ちよっとお腹の調子悪くてさ。あはは」

綾、手をすべらせ資料が散らばる。

綾「うわあ！ごめんなさーい！」

資料を拾い集める綾。

○マンション・中（夜）

壁のカレンダー。明日の日付に「結婚式」と書かれている。

綾、お揃いのマグカップを手に取って見つめる。

インターフォンが鳴る。

× × ×

綾、ドアを開け、驚いた顔。ドアの前に立っている桃子。

綾「桃子。どうしたの」

桃子「うーん。お腹空いちやった」

桃子、ほうれん草の入った袋を掲げる。

× × ×

キッチンに立つ綾と桃子。

桃子「それで、ほうれん草をお鍋に入れて」

綾、ほうれん草を逆さまに入れて入れる。

桃子「え、すごい。絶対根の方から入れると
思ったのに」

綾「これは覚えてるんだよね」

桃子「ちゃんと家庭科の先生の話聞いてたん
だね」

綾「違うよ。桃子が…」

桃子「ん？」

綾、口ごもる。

桃子「あ、そろそろいいかな」

桃子、ほうれん草を鍋から出す。

×

×

×

皿に入ったほうれん草のおひたし。綾
と桃子、テーブルにつく。

桃子「これで今度から一人で作れるね」

綾「うん。ありがとう」

綾、テーブルの下で手を握り締める。

綾「明日、早いんじゃないの？」

桃子「そうだよ。だから食べたらずぐ帰って寝ないよ」

おひたしを食べる2人。

桃子「私、ちよっとだけ、結婚していいのかわからないよ」

綾「え？」

桃子「結婚したら名字も変わって、亮平くんと家族になる訳でしょ？亮平くんのは大好きだけど、本当に大丈夫かなって」

綾、桃子を見つめる。

綾「じゃあ、やめたらいいんじゃない？」

桃子、あ然とする。

綾「桃子って自分の意見言うの苦手だし、亮平さんに頼まれたら何でも断れなさそうじゃないよ。上手くないかなと思う」

桃子「…なんでそんなこと言うの？」

綾「桃子が迷ってるって言うからアドバイスしてんじゃない」

桃子「綾に大丈夫だよって言ってほしくて相談したんだよ。モヤモヤしたまま結婚式したくないから……」

綾「私は、桃子が彼氏できたって嬉しそうに言ってきた時からずっとモヤモヤしてるよ！」

綾、机を叩く。桃子、肩を揺らす。

綾「……ごめん。もう寝るね。また明日」

桃子、悲しそうな顔。

○車内（朝）

三浦、運転する。綾、助手席で項垂れている

綾「はあ……なんであんなこと言っちゃったんだろう」

三浦「前日に喧嘩なんて最悪ですね」

綾「分かっているから言わないでよ」

○チャペル・中

綾、席でソワソワしている。

司会「新婦のご入場です」

扉が開く。ウェディングドレスを着た

桃子、父親とバージンロードを歩く。

綾、桃子に見惚れる。桃子、綾の前を
通り過ぎる。

× × ×

桃子、亮平と手を取り合い、幸せそう
に笑う。

綾、口を手で押さえ、退出する。

○同・トイレ

綾、手洗い台に項垂れる。

綾「はあ…」

綾、手を濡らし、頬を軽く叩く。

○同・ロビー

綾、トイレから出てくる。三浦、壁際
に立っている。

綾「三浦くん。どうしたの？」

三浦「高島さんが急に出ていくから。周りからしたら僕は彼女を追いかけない薄情な男ですよ」

綾「そっか。彼氏役だもんね。ごめん」

三浦「体調悪いですか？」

綾「ううん。大丈夫。トイレ行きたかっただけ」

三浦「じゃあ戻りましょう」

三浦、会場のドアに手をかける。

綾、その場から動かない。不安そうな顔の綾。

○同・中

桃子、会場を見渡し、綾を探す。

司会「続いて、指輪交換です」

桃子と亮平、互いに指輪をはめる。

○同・ロビー

綾、三浦をまっすぐ見て笑う。

綾「帰ろうかな」

三浦「え？」

綾「やっぱり見てられないや」

三浦「…僕は構いませんけど」

綾、無理にふざけた調子で、

綾「桃子はこれから家庭を持って、おばあちやんになったら家族にお世話してもらうのに、私は1人で死んでいくんだな…って、悲しくなっちゃった」

三浦、真剣に綾を見つめる。綾、俯く。

綾「最低だよね。大事な結婚式にこんなこと考えるなんて」

三浦「大丈夫です」

綾、顔を上げる。

綾「え？」

三浦「例えば、高島さんは誰にも介護してもらえず孤独死するとします」

綾「ちよつと…」

三浦「でもその1週間前、近所に美味しいパン屋ができて、高島さんは大好きなメロンパンをたらふく食べました」

不思議そうな顔の綾。

三浦「それはそれで幸せじゃないですか」

綾「それは、それで…？」

三浦「絶対あるんですよ。今は見えてない幸せが」

綾「…そうかな」

三浦「幸せな人生かどうかなんて、死ぬ時まで分かりません」

綾、感心した様子。

綾「…難しいこと考えてるんだね。三浦くんって」

三浦「いや、高島さんを見てたら、そう思いました」

綾「私？」

三浦「僕と仲良くなりたかった時、仲良い方が楽しいからって言ったじゃないですか。仕事なんて退屈でしかないのに」

綾、ぽかんとして三浦を見ている。

三浦「でも、退屈の中に楽しみを探してみてもいいのかもって思いました」

綾「…そっか」

三浦「もっと周りに興味を持ってみようって、少し変わったんですよ。僕」

三浦、僅かに微笑む。綾、三浦を見つめている。

司会の声「それでは、誓いのキスです」

綾、体が勝手に動いたように走って会場へ。

○同・中

亮平、桃子に顔を近づける。桃子、ゆっくりと目を閉じる。

綾の声「ちよつと待ったー！」

桃子と亮平、驚いて振り向く。

入口の扉を両手で開いている綾。

桃子「綾」

綾、息を切らしながら、2人に歩み寄る。

綾「その男は、結婚詐欺師だ！」

亮平「はあ？」

ざわつく会場。桃子、困惑した様子。

綾、大きく息を吸う。

綾「桃子。高校生の時からずっと大好きでした！」

桃子、目を丸くして綾を見る。

綾「私がいるのに、こんな訳分からない男と結婚するなんてふざけるな！馬鹿野郎！つて思いました！」

亮平「なんだと？」

桃子「ちよつと、綾？」

綾、目をぎゅつと瞑る。

綾「だから、私と結婚してください！」

綾、桃子に手を差し出す。桃子、悲しそうな顔。

亮平、綾を見つめ、ふっと笑う。

亮平「いいや、世界で一番桃子を愛してるのは俺です」

亮平、桃子に手を差し出す。

亮平「俺が馬鹿なこと言っても笑ってくれて、悩んだ時には静かに見守ってくれる桃子が大好きです。俺が一生幸せにします」

綾、密かに顔をあげ、亮平を選ぶよう目線で合図を出す。

桃子、ゆっくりと亮平の手を握る。

亮平「よっしゃー！」

亮平、桃子を抱きしめる。会場から拍手と歓声が起こる。

綾「チクショー！」

綾、大袈裟に悔しがる。会場から笑いが起こる。

○同・ロビー

三浦、ソファに座り、コーヒーを飲んでいる。

○同・中

桃子と亮平、誓いのキスをする。綾、
微笑んで2人を見る。

○同・ロビー（夜）

桃子、友人に囲まれ楽しそうに話して
いる。

その様子を見ている三浦。綾、落ち込
んだ様子でチャペルから出てくる。

綾「スタッフの人すごい怒ってた」

三浦「そりやそうでしょう」

桃子、友人に挨拶し、綾に駆け寄る。

桃子「綾」

綾「あ…」

桃子「もう、びっくりさせないでよ」

綾「ごめん。盛り上がるかなって」

桃子、ため息を吐く。

桃子「綾って昔からそうだよね。人のために
自分のことは適当にするの」

綾「え？」

桃子「誰も傷つけないように、自分を犠牲にするでしょ」

綾、恥ずかしそうに目を逸らす。

綾「そんなことないけど……」

桃子「綾のそういうところ、すごいと思うけど、私はあんまり好きじゃない。悲しくなるから」

桃子、綾を抱きしめる。綾、驚いた顔。

綾「桃子？」

桃子「本当はちょっと気付いてた。綾が男の人に興味ないのも、なんで亮平くんのこと悪く言うのかも」

綾、狼狽える。

綾「え……いや、あれは冗談っていうか」

桃子「私は、綾に幸せになってほしい」

綾、泣きそうな顔。

桃子「綾、ごめんね。ありがとう」

綾、桃子を離す。明るい調子で、

綾「だから冗談だってば。私もすぐ素敵な彼氏作って結婚するから」

綾、桃子に微笑む。

綾「結婚おめでとう」

桃子、微笑む。桃子、三浦の方を見て、

桃子「ねえ、あの人は？」

綾「レンタル彼氏」

桃子「え？」

亮平、やって来て、

亮平「綾ちゃん。俺初めて本物見たよ。ち

よつと待ってーってやつ」

綾「亮平さん」

綾、深く頭を下げる。

綾「桃子のこと、よろしくお願いします！」

亮平、ぽかんとする。

桃子「（笑って）誰目線なの？」

綾「確かに、おかしいね」

亮平、ニコツと笑う。

亮平「任せてください」

綾、笑い返す。

○車内（夜）

助手席に座る綾。三浦、シートベルトを締める。

三浦「お疲れ様です」

綾「ありがとう」

綾、俯く。

綾「あー。スッキリした。これで明日から次の恋に行けるぞー」

三浦、綾を一瞥し、発車させる。

綾、冗談っぽく、

綾「パン屋の近くに引っ越そうかな」

三浦「いいじゃないですか」

綾「毎週三浦さんとピクニックしてさ」

三浦「いや、僕は仕事があるので」

綾「分かってるよ。本気で言ったわけじゃない」

綾、涙声になる。

綾「パンなんてどうでもいいから、桃子と一緒になっていたかったなあ」

綾、涙を拭う。

三浦「大丈夫ですよ。大丈夫。大丈夫」

三浦、前を向いたまま。綾、泣きじゃくる。

綾「前から思ってたけど、大丈夫大丈夫って

さあ。何も大丈夫じゃないから」

三浦「でしょうね」

綾「でしょうねって…」

三浦「でも、大丈夫な気がしてくるでしょ。

大丈夫、大丈夫って言ってる」と

綾「そうかなあ」

三浦「大丈夫大丈夫」

綾「うるさいよ…」

○会社・中（朝）

綾、観葉植物の周りを掃除している。

三浦、PCで作業している。河村、綾

と三浦を交互に見て、痺れを切らし綾

のもとへ。

河村「私やりますよ」

綾「あ、ありがとう」

綾、河村にほうきを渡す。

河村「なんか高島さん：目腫れてませんか？」

綾「え、そう？」

河村「昨日何かありました？」

河村、綾を見つめる。綾、困って目を泳がせる。

三浦、立ち上がる。

三浦「すみません」

河村「へ？」

三浦「手伝います」

ちりとりを構える三浦。河村、ぽかんとする。

三浦「こまめに掃除するの大変なんで、造花にしませんか？」

河村「え？ああ：」

河村、怖がる。

河村「なんか話しかけられたんですけど：怖い怖い」

綾、吹き出す。

河村「何笑ってるんですか」

綾、声を出して笑う。

綾「三浦くんありがとうね」

河村「何？どういうことですか？」

○道（夜）

三浦と祥子、手を繋いで歩く。

祥子「今度、息子に会いに行ってみようと思
うの」

三浦「え？どうして？」

祥子「しっかり気持ち伝えたことなかったか
ら。ちゃんと謝りたいの。すぐ追い返され
るかもしれないけどね」

三浦「そっか。：頑張って」

祥子「ありがとう」

三浦と祥子、微笑み合う。

○マンション・中

桃子と亮平、段ボールに荷物を詰める。

綾、両手を広げて歩き回る。

綾「わーなんか広くなったな」

桃子、綾を見る。

桃子「ちやんとご飯食べて、夜更かししないようにね」

綾、ニヤリと笑う。

綾「それはどうかな」

桃子「もう」

綾「ウソウソ。心配しないで。1人で楽しくやるから」

桃子と亮平、微笑む。

綾「2人も頑張つて！」

桃子「ありがとう」

亮平「よっしゃ。じゃあ運ぶか」

段ボールを外に運び出す3人。

○横断歩道（夕）

綾、手を広げて歩く。深呼吸をする。

綾「…お腹すいた」

青信号が点滅する。綾、走り出す。

綾、横断歩道を渡りきり、息を切らしながら笑う。

お
わ
り